

さるしま junior

第11号（秋一その1）

令和3年9月6日発行

園長 小菅 哲也

心惹かれた、あの技、あの速さ、あの迫力

8月24日（火）から9月5日（日）まで開催された『東京2020パラリンピック』。オリンピックに続きたくさんの感動を味わった方も多いのではないのでしょうか。

- ・鋭い方向転換、速くて正確なスマッシュの車いすテニス
- ・鋼と鋼が真っ向からぶつかり合う、迫力満点の車いすラグビー
- ・稲妻のような車いす操作と、華麗なシュートの車いすバスケット



- ・ボールが放つ鈴の音と、足音、掛け声に全神経を集中させるゴールボール、ブラインドサッカー
- ・伴走者と心がひとつになった走りでトラックやロードを駆け抜けるランナーたち
- ・心と体のあらゆる機能を駆使し、懸命の泳ぎや走り、技を見せるアスリートたち……



その磨き抜かれた技や、鍛え抜かれた体、チームとしての一体感、どんなことにもくじけない精神力に、障害があることをすっかり忘れて、競技に見入っている自分がいました。

そして、ふと、ひとりの同級生のことが思い出されました。



相棒は、今も変わらぬスーパースター



Y君は、明るく、楽しくて、みんなの人気者でした。運動神経が抜群で、体育の授業ではいつも大活躍でした。そのY君には、左手の手首から先がありませんでした。

小学校時代、Y君と私は、同じソフトボールのチームに入っていました。6年生の時、Y君がピッチャーで、私がキャッチャーでした。

Y君は、グローブを左腕にかぶせて、ひとつ大きく息をつくと、体をいっぱいを使ってボールを投げます。投げ終わると、グローブを素早く右手にはめてボールを受けます。

「自分で考えた」というその動作は極めて機敏です。

6年生の最後の大会、私たちのチームは決勝に進みました。この試合、Y君は好調で、いつも以上にスピードが乗っている感じでした。2点をリードして迎えた4回、あと2イニング抑えれば優勝です。その時です。相手チームの選手がY君の左手のことを話しているのが聞こえてきました。それはY君の耳にも入りました。Y君は、急にコントロールを乱し、この回3点を取られてしまいました。私たちの優勝は夢と消えました。



「Y君がリズムを崩したとき、すぐにタイムをとって励ませばよかった」。私は、悔やんでも悔やみきれませんでした。その後、Yさんは職人の道へ進み、仕事の傍ら小学生のソフトボールのコーチや、サーフィンのインストラクターとして活躍しています。今も毎朝顔を合わせますが、私たちにとって憧れの存在であり続けています。

今あるもの・今できることに目を向ける

「失ったものを数えるな、残されたものを最大限生かせ」。
“パラリンピックの父”と呼ばれるグットマン博士の言葉です。この言葉は、パラリンピックの精神を最も端的に表していると言われています。「ないものではなく、今あるものに目を向ける」ことは、パラリンピックに限らず、すべての人たちの生き方に当てはまることです。



以前は、障害のある人の「ないもの」や「できないこと」ばかりに目が向けられ、それが「特別扱い」にもつながっていました。ともすると「やさしさ」と「差別」とをはき違えていたこともありました。



価値観の多様化やインクルーシブの考え方が広まるにつれて、私たちの意識にも少しずつ変化が見られてきました。周りの人と比べて評価したり、特定の価値観で物事を判断したりするのではなく、まずは、その人の「今あるもの」「今できること」に目を向ける。すると、今まで押し潰されていた「個性」に光が差してきます。眠っていた「個性」が輝きはじめます。パラリンピックの選手たちが見せてくれた、あの技、あのエネルギー、あのひたむきさ、あの笑顔、あの強さは、こうした中で育まれてきたものに違いありません。

諏訪幼稚園には、多様性を受け入れる土壌があります。それぞれの個性や、言葉や文化の違いを認め合いながら、子どもたちは和気あいあいと園での生活を送っています。69年間のさまざまな人との関わりや、互いを認め合う活動の積み重ねが、こうした土壌を創り上げてきたのでしょう。この土壌をさらに豊かにしながら、残りの7か月間を過ごしていきたいと思ひます。

